慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	政軍関係
Sub Title	
Author	赤木, 完爾(Akagi, Kanji)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2009
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.82, No.10 (2009. 10) ,p.130- 131
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	神谷不二先生追悼記事
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20091028-0130

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

先生は冗長な表現を嫌って、「寸鉄人を刺す」ことを好んだ。最新の理論よりも中国の古典を引用したし、「国際政治学は大人の学問だ」「日本には……史はあっても、……論がない」と言うのが口癖であった。また、ご自分を「長編作家」ではなく、「短編作家」と心得ていた。

リアリズムの国際政治学は確かに大人の学問である。そのことを教える論客が少なくなるなかで、先生は東西冷戦や日米関係の「語り部」を自称して、八十二歳になっても旺盛に執筆活動を続けた。まさに「鉄人」と言ってよい。何の前触れもなく心不全に倒れたが、その直前まで机に向かっていたのだから、神谷先生らしい大往生であった。

心から恩師のご冥福を祈る。

法学部教授　小此木　政夫

政軍関係

神谷不二先生には平成二一年二月二〇日未明に急逝された。享年八二であった。翌週以降の予定も入っており、その日も平生と変わらぬ様子で、寝につくまで執筆をされていた由である。心不全での突然の逝去であった。昭和四五年に石川忠雄先生の招聘によって大阪市立大学から本塾大学法学部に転じられたが、私が先生の謦咳に接したのは昭和四八年からである。以来三六年にわたって薫陶を受けることになった。厳しく愉快な学部ゼミでの時間は得難い経験だった。その学恩は計り知れない。

若い頃、先生の著作でもっとも影響を受けたものは、「トルーマンとマッカーサー—朝鮮戦争指導の一断面」（一九六四年）および「政軍関係に関する一考察—シヴィリアン・コントロールについて」（一九六三年）である。顧みれば、神谷先生が先鞭をつけられた、政策と戦略の分析、ならびにそれらが遂行されるプロセスでの政軍関係をめぐるテーマに、同門の一人として、説いて尽

くせぬ憾みを残しつつ、菲才を顧みず三〇年携わってきた。

前者は、アメリカの政軍関係の特異な歴史に胚胎する戦争観と、誰にとっても未知であった核時代黎明期の戦争としての朝鮮戦争がどのように交錯しつつ、新しい時代の新しい戦争を生み出していったかを、周到な研究に基づいて、緊張感あふれる筆致で活写した傑作であると思う。後者は、そもそも「Civil-Military Relations」に「政軍関係」という言葉を初めて与えた記念すべき論文である。我が国において戦前と同様戦後においても軍事力の近代的あり方に対する理解が欠如していることへの鋭い指摘、軍に対する文民ないし議会の制度的優越が、必ずしもすぐれた外政・戦争指導を自明に保証するものではないとの主張に、衝撃を受けたことを鮮やかに記憶している。

最後に先生と長時間話し込んだのは、平成一九年六月一五日に東京倶楽部でお目にかかり、塾の創立一五〇年記念の「復活！　慶應義塾の名講義」への登壇をお願いした時であった。話題は徒然に先生が最初のアメリカ留学からの帰路ヨーロッパを周遊し、マルセイユから日本郵船隅田丸で帰国した船旅の思い出やら、近時の六ヵ国協議、朝鮮戦争研究の現況など多岐にわたった。その折に初めて先生から、留学先のコロンビア大学で、研究室がサミュエル・ハンチントン教授と隣り合わせであったことを伺った。ハンチントン教授も一九二七（昭和二）年生まれ、神谷先生と同い年であったが、先生より二ヵ月早く逝去された。

平成一九年一二月一五日に三田五一七番教室で行われた「日本の国家戦略」と題する講義にはゼミの卒業生を中心に多数が参集し、大盛況であった。かつて同じ教室に集った多くの仲間とともに久方ぶりに先生の話を聴くことができたことは、まことに幸運であった。期せずしてその日が最後の講義となった。

法学部教授　赤木完爾